

今後の予定 (予定変更の可能性があります。いずみホームページをご確認ください)

10月15日(土)

第83回 甲状腺エコー検査 in なとり(名取教会)

11月26日(土)

第84回 甲状腺エコー検査 in かくだ

ほか、記念冊子(証言集)発行など



編集後記

核(原発)事故から11年、8月30日に事故原発の立地町である双葉町内「復興拠点」の避難指示が解除されました。だからといって小林委員の巻頭言にもあるように、「復興」のゴールが見え、この歴史的事故が終わったのではありません。国と東京電力が引き起こした公害事故は夥しい人々の運命を翻弄、事故前と後を境にビリビリ引き裂きました。それは十人十色の物語として今も連綿と続いていて、既に生活再建した方々がおられる一方、その対極で自死に至り、精神的に不安定な日々を送っていたり、事故前より高い被ばくに晒され孤立、悩み、苦しみ、支援を必要としている方々がおられます。

今号では、子どもを被ばくから守るためのひとつの手段として、避難移住を選択した(しようとしている)親子を支援している『リポーン』。海は放射能のゴミ捨て場ではない、と海が一番近くで共生している漁業者の声や市民運動をご紹介します。

国家的規模の核(原発)事故に対し、個人や単体の組織では限界があります。私たちはゆるやかに連携してこれらの諸問題に向き合い、生命を輝かせるためのよりよい答えを見つけていくことが必要ではないでしょうか。

いずみ編集部

「いずみ」の活動は国内外の支援活動によって支えられています。この活動を続けていくためにみなさまのご支援、ご協力をお願いいたします。献金、ご支援は下記専用口座をご使用下さい。

ご支援のお願い

送金先金融機関 ゆうちょ銀行

口座番号 02270-2-114887

加入者名 いずみの会

通信欄に 会費(一口2000円)、または、献金(支援)とお書き下さい。

運営委員長 布田秀治(いずみ愛泉教会)

運営委員 小林 休(鳴子教会) 鈴木のぞみ(川俣教会)

寺田 進(原町教会) 布田秀治(いずみ愛泉教会)

協力委員 保科 隆

顧問 篠原弘典(原子核工学専攻)

スタッフ 会津かよ子 服部賢治

会計協力 渡辺広衛

日本キリスト教団東北教区 放射能問題支援対策室いずみ

UCCJ Tohoku District Nuclear Disaster Relief Task Force "IZUMI"

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1丁目13-6

TEL/FAX 022-796-5272

メールアドレス izumi@tohoku.uccj.jp

ホームページ <http://tohoku.uccj.jp/izumi/>



いずみ

題字 丹治正雄氏

過去形で終わらない支援

東北教区放射能問題支援対策室いずみ 運営委員 小林 休 こぼやし ゆたか

2023年度で東北教区放射能問題支援対策室の活動が区切りとなります。しかしいったい誰のための区切りなのでしょう。

第15号にて、双葉町の館林さんの畑と自宅へ訪問させていただいた報告を書かせていただきました。手塩にかけて育てたイワヒバでしたが、その後、不十分ながら賠償の対象になりました。しかし、家をはじめまだ賠償が実現していないものも多くあります。震災前と比べ、全く元通りになっていません。そもそも未だに仮設に住まなければならない状況が続いているのはなぜでしょうか。いつ震災前の状態に戻るのでしょうか。

さて、2020年の最初の訪問後、さまざまな媒体でレポートし、そのことも、館林さんに伝えていました。すると、また館林さんから双葉町の自宅を見に来てほしいと言われました。その時に正直に思った本音は「1回訪問したのになあ・・・」でした。館林さんの真意がわからないまま、2021年10月に再訪問し、今年4月にも「墓に通じる道を修繕したいから来てほしい」と言われました。なかなか日程調整が出来ないでいると、「仮設(郡山市)でもいいから立ち寄ってください」と言われました。その時にピンとききました。館林さんが求めているのは、自分の置かれている現状を知ってほしい、話を聞いてほしいことですが、もう一つ大事なことが抜け落ちていました。私はどうしたって原発事故被害の当事者ではないですし、館林さんから見ればよそ者です。

私は1回訪問すれば、「原発避難者の悲惨さ」がわかったつもりになり満足でしょうし、いつでも「逃げられる」のです。しかし、当たり前ですが、館林さんは原発被害から逃げる事ができない当事者です。負いつけている苦しみが忘れられ、社会から取り残されていく不安を自らの力で拭うことはできないのです。

決して埋めることができない、その隙間を少しでも小さくする手立ての一つは「関わり続ける」ことだと思います。被害の現実を見てきた、聞いた、伝えたではなく、見続け、伝え続け、聞き続けるということです。そのことを通して少しでも「つながり」を実感してもらうことが大切だと思いました。コロナ禍でやれることは限られていますが、直接的な支援が出来なくても、電話もできますし、手紙も送れます。「忘れてないよ、これからも忘れないよ」を伝える手段はたくさんあります。支援が過去形に終わらず、現在進行形、未来形であることが、ますます重要だと実感しています。

2022年 8月記



2021年10月 双葉町内 事故当時は畑だった
今は雑草が生い茂り、放射線量も高い

【報告】心と体をリラックス！！ 第15回親子短期保養プログラム in 北海道

初めての保養引率を終えて

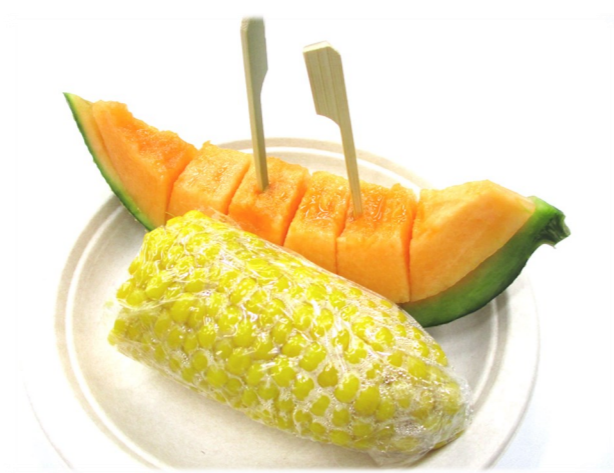
いずみ運営委員 寺田 進

プログラム中、「わかちあい」という時間を設け、保養参加者の保護者から放射能に関するストレスの一方、支援への感謝の思いを共有しました。この感謝をどう表せばよいのかと話された方や、本当にストレスを忘れ去りはじめて心から親子で楽しめたと涙する方が複数おられたのです。

被災や原発事故から11年経ち、私たちの心や身体、自然環境への放射能影響に関する情報は激減しました。世の中はさも何事もなかったかのように進み、取り残されたような思いを口にすることもできぬまま、今度は気候変動による激しい自然災害や大きな地震が繰り返し福島では起きています。なんでもありのようになった世の中、ついにコロナ禍3年目に突入、今は戦争の映像があふれています。この閉塞感はどうでしょうか。

参加者の子どもたちの年齢は1歳から15歳で、彼らの人生はこれらにすっぽり包まれています。この子どもたちを昼夜愛し、育て、すべてを共にして精魂も体力も使い切る若い親たちの家庭生活は危機の連続です。放射能被害への心配やストレスは、良き伴侶にも告げられない日々が続いているのではないのでしょうか。私は支援としての保養プログラムをあと何回かできたら有り難いと思うのです。

2022年 8月記



プログラム

8月5日（金）晴れ

北海道クリスチャンセンター到着。夜、歓迎会。

8月6日（土）晴れ

北海道大学キャンパス内でのオリエンテーリング

8月7日（日）くもり一時雨

終日、フリータイム。

8月8日（月）くもり時々雨

午後、札幌市青少年科学館見学。

札幌北部教会にて夕食会。夜、わかちあい。

8月9日（火）晴れ

お別れのつどい。夕、仙台空港で解散。



感謝

放射能問題支援対策室いずみ

第15回の保養プログラムは、「いずみ」と北海・奥羽・東北の3教区からなる北日本宣教会議が主催。カトリック正義と平和仙台協議会、そして、北海教区東日本大震災支援委員会の協賛、全面的なご支援を賜り、福島県内7家族23名の親子を北海道にご案内いたしました。

過去14回のプログラムにおいて、その度、本当にたくさんの方々のサポートをいただいておりますが、今回はコロナ禍ゆえ、感染対策への慎重な検討を重ね、スタッフを絞ったりせざるをえませんでした。それでもなお多くの関係者みなさまの献身的なご支援があり、直接的なご支援はいうまでもなく、プログラムへのお祈り、ご寄付を数多くお寄せいただいております、必要経費をはじめ、感染症対策のための物品購入、交流スペース確保、ほか、参加者への金銭的なご負担軽減など、全盲者にとっての盲導犬や杖のように、なくてはならないご支援を参加者親子に提供できました。

コロナ禍に加え、放射能汚染地域における健康管理支援との同時並行した取組みのため、試行錯誤の連続も、手厚いお支えにより2年ぶりにプログラムを再開できました。ご支援、お祈りいただいた全てのみなさま、ありがとうございました。



上：札幌北部教会での夕食会準備の様子

下：緑豊かな中でのオリエンテーリング



保養プログラム 参加者感想文

今回、初めて保養のプログラムに参加させて頂きました。今回が15回目ということで、本当に活動を続けて下さったことに感謝しております。

子どもは震災後に産まれましたが、ニュースや本で学び、震災のことを知っています。少しずつ以前の生活に戻りつつある中での、新型コロナウイルスの感染流行…。色々と制限された中での生活。思いっきり遊ばせてあげられないもどかしさ。マスクが当たり前の日々。その中で、今回この保養に参加し、子どもたちのキラキラと全力で楽しむ笑顔を見ることができて、震災やコロナのことを忘れ、私自身この4泊5日を心の底から楽しませて頂きました。

参加する前はドキドキと不安が大きかったのですが、スタッフの皆様が温かく迎えて下さり、親切にして下さり、一気に不安も解消されました。また、同じ世代のお母さんたちとの、子育ての悩みも共有できて、リフレッシュさせて頂くこともできました。

コロナ、第七波が拡大しつつある中で、保養を計画、実行して下さいありがとうございました。スタッフの皆様におかれましては、大変悩まれたことと思います。その中でも保養を中止にせず、実行して下さいということが、私たち親子の力になり、これからの日々もこの保養のこと、出会った仲間のことを思い出し、「よし、今日も頑張ろう！」と思わせてくれると思います。

本当に本当にありがとうございました。また、みんなに会いたいです！！

2022年 8月記
福島県内在住 30代母

5日間大変お世話になりました。申し込みの時点から今日まで、私たちが、楽しく、快適に、安全に、安心して過ごすことができるよう細かなところまで、ご配慮いただいていたことに、感謝の思いでいっぱいです。

家族でこんなに長期間旅行をするのは初めてでした。子どもたちは飛行機も初めて、下の子は新幹線も初めて。そして、家族全員初めての北海道でした。初めての経験をたくさんさせていただきました。きっと私たち家族にとっていつまでも心に残る思い出になると思います。

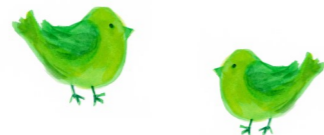
3.11のこと。10年以上たった今でも、こんなにも遠く離れた場所から、今の福島のことを考えて下さり、心をつくしてくださる方々がたくさんいらっしゃることに驚くと共に、今の私たちの生活が多くの人々の思いで成り立っていることに感謝の気持ちを改めて持つことができました。

福島で生まれ育っていく子どもたちは、福島での生活があたり前の日常であり、他の地域で育つ子どもたちと同じように健やかに心も体も成長できることこそが復興なのだと思います。自分たちの生まれ育った町に誇りを持ち、広い世界のどこへ行ったとしても、堂々と胸を張って福島から来ましたと言える世の中であることを切に願います。

改めて、この5日間、ありがとうございます。

これが最後かもしれないということですが、ご支援としての保養を継続していただけることを願っています。

2022年 8月記
福島県内在住 40代母



「保養プログラムを終えて」

日本基督教団北海教区 東日本大震災支援委員会 委員長 菊地 啓示

「第15回親子短期保養プログラムin北海道」は、わたしにとって二つの意味でとても思い出深いものとなりました。

一つはコロナの状況下での実施となったことです。昨年度から日程を決めて準備してきたのですが、開催日が近づくにつれて感染が拡大し、参加を辞退されるご家族もあったのはとても残念でした。期間中安全に、また安心して過ごしていただくために、直前になるまでドキドキしながら「いずみ」との相談を重ね、皆さんをお迎えするために可能な限りの感染対策を講じました。特にこれまで大変喜ばれてきた歓迎会の食事について、泣く泣くメニューを見直さざるを得なかったのは、辛かったです。

また、わたし自身は今回のプログラムに「委員長」という慣れない立場で参加することとなり、かなりの緊張がありました。けれども、準備から実施のすべてにわたり、知恵と経験の足りないわたしを、委員会や「いずみ」の皆さん、また参加者の皆さんが色々な面でカバーしてくださったおかげで、事故も感染もなく、楽しく無事に終わられたと思います。本当に有り難うございました。

先日送っていただいたアンケートのまとめを拝見しますと、コロナを警戒しながらの開催で、色々と不自由のあった期間ではありましたが、それでも皆さんがそれぞれに「心と体をリラックス！！」なされたことをあらためて知らされて、大変嬉しく思っております。おひとりお一人の笑顔や笑い声、元気な姿を思い浮かべるときに、今回開催できた喜びと共に、今後の活動にもつながる大きな励ましを与えられます。「いずみ」主催による保養プログラムはここで一区切りとなる(?)ですが、委員会では引き続き、東北の地に暮らす皆さんを心に思い、その必要が少しでも満たされることを願いつつ、活動を続けていきたいと思っております。

最後に、委員会活動の原動力となっている聖書の言葉をお贈りいたします。

「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」

皆さんの上にイエス様の祝福が豊かにありますように、お祈りいたします。

2022年 8月記

2011年3月11日の大震災と福島第一原発事故の衝撃は、本当に大きなものでした。そしてその後の政府の方針が、最も被害を受ける子どもたちを守ろうとしないことに、同じだけの衝撃を受けました。本来あるべき公的支援はなく、あるのは年々強まる抑圧です。

◎保養支援から、避難・移住支援へ

たまたま大きな放射能汚染から逃れた西日本に在るものとして、子どもたちの保養を2014年まで、春夏冬の長期休みごとに開催し、多くの親子に出会いました。

しかし保養から帰り、日々被ばく回避の努力をする親子の苦労を見るにつけ、保養だけでは間に合わないという思いになり、子どもを守る裁判に注目しました。被害に遭い大変な苦労の中、裁判の原告となり、真実を求め闘う方たちがいるということは、私にとっても希望でした。そして保養に来ていた親子の中から、避難移住を決意される人が現れ、避難移住に対する支援を始めました。

◎リボーンの立ち上げ

そのような活動の中で、避難移住のために自らの資産を使ってほしいという申し出を受けました。それは、被ばくから逃れてほしいという原爆被爆者の方の思いのこもった大きなお金でした。貴重なサポートをしっかりと活かしたいと思い、避難した方と、ご家族が避難し、福島県郡山市で被ばく問題に取り組みながらカフェをされている方に、福島の拠点として協力を依頼し、一般社団法人リボーンの設立を行いました。避難移住助成金20万円と、生活資金貸与(無利子)という形で、顔の見える手から手へと広報を始めたのが2016年でした。「リボーン」はReBorn、「生まれ変わる」「再生する」、結ぶリボンにもかこつけ、立場の違う者同士が繋がり結ばれるようにと名付けました。それぞれ状況は違っても、いのちを尊ぶ願いによって繋がり、子どもたちの未来を築いていきたい…。そんな思いが込められています。

◎避難移住支援に必要なこと

子どもを育てながらの避難移住がどれほどの苦労を伴うのか、それが10年以上に及ぶ時に、どのようなことが起きてくるのか…、大きな多方面のサポートが必須です。そのような意識を持つ「人のつながり」の中での「仕事、教育、健康維持」に関する具体的な場が求められます。幸い私が理事を務める福祉会があり、その近くに福島から避難移住をされた方には、子育てをしながら福祉会で仕事をしてもらいました。今では2人の方が資格も取られ職員として支えてくれています。教育面では公立学校以外のオルタナティブな教育の場があり、情報を得て親子とも意識を変え、その子にあった教育を選択できたことは重要で、教育と被ばく問題をつなげた本も親子で執筆されました。(下写真：リボーンで取扱っています。ご連絡下さい。)

健康維持に関しても、常に情報共有し、被ばくに理解のある医師と連携し、避難当初の体調不良をしっかりサポートしていただきました。



「ありのままの自分で」
せせらぎ出版(2020年刊)



◎「復興政策」の抑圧の中での被ばく回避支援

リボーン立ち上げの頃に空き家を譲り受け、避難移住の下見や保養に使えるよう整備を始め、リボーンの拠点とし、地域と連携した仕事作りも計画しました。しかし2016年度末、福島県からの「自主避難者」への政府の家賃補助打ち切りがあり、避難している人は帰還を強く求められ、これからの避難移住には大きなプレッシャーがかかることとなりました。避難継続のため生活資金貸与の利用があいつぎ、資金減と、ニーズが「避難の維持」へと変化したことで、計画を保留し、少しずつ整備を続けています。

福島での相談も、避難移住を願いながらもできないことの苦しさ、また避難から帰還した人の思いなど話を聞き、被ばく防護や健康維持の情報共有、安心食材の分け合い等が中心となりました。そういったつながりの維持は、子どもたちの体調の変化や、進学などの機会を移住へとつなげる大切な取り組みです。地道に継続すべき重要なことと考えています。

福島連絡先 「イノカフェ2nd」(郡山市)

Email cafeplus.k@gmail.com



◎核災害における助け合いの模索

～ご支援のお願い～

生活資金貸与を利用した方が、自分のペースで返済を続け、再び必要になった時に利用できるよう、基金として機能すればと願っています。しかしながら、病气や事故、災害で返済が難しいケースがあることに加え、リボーンには現在収入がなく、頼りになる基金には程遠い状況です。これからいかに収入を増やすかが課題です。

2020年度に「12人の絵本作家 応援カレンダープロジェクト」の支援先としていただき、助成金にあてる寄付金150万円の確保ができたことで、2021年度には避難移住支援助成の公募を行い、1件の助成を行いました。コロナ禍中であり、応募は少なかったのですが、問い合わせから潜在的な希望者がおられることが確認できました。

公募は今も継続中です。

各地に避難移住した方に対して十分なサポートができない中で、お金を介した支援というものは難しいです。しかし避難移住やその継続にとって、最も必要であるものの一つがお金であり、最も支援がないのもお金です。それを、先達の被爆者や思いのある多くの方々から受け取るということは、被災の中を生きる力となることは間違いありません。そしてそれがまた、誰かに自分ができることをするという「恩送り」の生き方へと展開されていくことも、それぞれの人生にとって大切な支えとなることと思います。助け合いの形を模索し続けたいと思います。もしご支援の可能な方がありましたら、ご連絡いただけますとありがたく存じます。

一般社団法人リボーン

Email reborn.himeji@gmail.com

Tel 090-3611-0162

ホームページ

<https://rebornhimeji.jimdofree.com/>

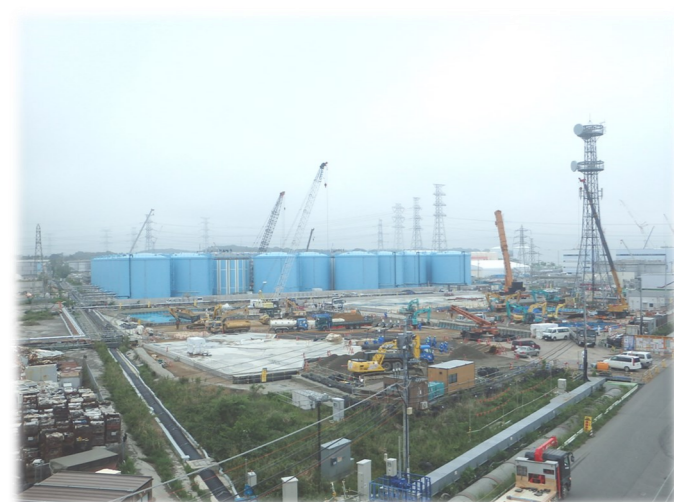
2022年 8月記

「これ以上海を汚すな！市民会議」は、福島県内外で脱原発運動などの活動に関わる市民が、放射能汚染水の海洋放出を止めたいと緩やかにつながり、時には緊急に行動するネットワークです。今までの活動は、所轄庁である経産省資源エネルギー庁との意見交換会や、東京電力（以下、東電と略）、国、福島県への申し入れ、学者、研究者の汚染水に関する講演会や、いわき市の海浜公園で「海といのちを守る集い」を開催し、毎月13日には各地に呼びかけてスタンディングをするなどしてきました。

菅前首相は昨年2021年4月13日、唐突に関係閣僚会議で、2年後の2023年春には汚染水の海洋放出を始めると決定し、東電はそれに沿って放出の準備を始めました。

福島県内では2020年度の時点で、7割の市町村議会が海洋放出に反対または慎重な対応を求める意見書を国に提出し、県民の7割も反対しており、国と東電は県漁連との「関係者の理解なしには如何なる処分も行わない」とした約束は守られないまま決定されました。

この間、私たちが、国や東電への要請で主に問題にしてきたことは、



2017年5月26日 福島第一原発構内 出典：東京電力ホールディングス

①合意形成がなされていないこと

国・東電が意見を聴取するのは特定の団体など限定的なため、一般の市民が自由に発言できる住民公聴会を県内に限らず設け、広く意見を聞くことを要求してきましたが、未だに開催されていません。漁業者との約束も「反故にはしていない。丁寧に理解を求めるとしてはいますが、理解という名の押し付けでしかありません。

②貯留タンクの中身の核種や濃度、総量についての明確な情報公開が行われていないこと

汚染水の中身に関しては報告されている64核種だけではなく、他の核種も化学毒物も入っているとの指摘もあります。海水で希釈したとしてもタンクに入っているものを海に投棄することになりありません。

③トリチウムや他の核種のリスク評価が低いこと

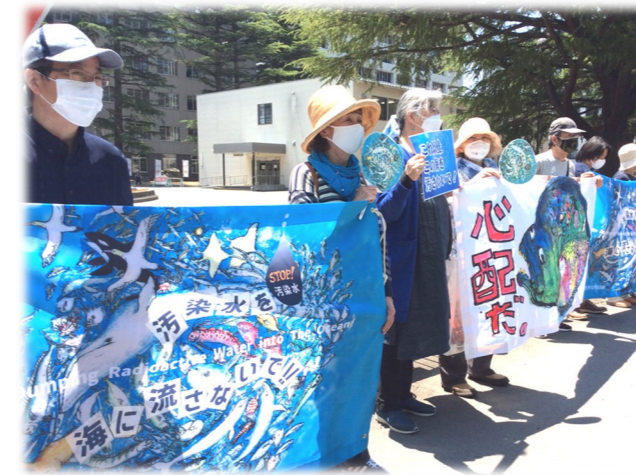
トリチウムは放射性物質にもかかわらず、生物に影響がないような喧伝がされていますが、細胞内に取り込まれやすく、細胞内で放射線を出し続けます。海水で希釈し規制基準をクリアしたとしても放射性物質は分解しないため、海の植物や生き物に取り込まれ食物連鎖の末、食卓にのぼります。

④汚染水対策への誠意ある取り組みがないこと

代替案として石油備蓄基地にあるような大型タンクで減衰するまで陸上保管することや、コンクリート固化体にして保管することは土地がないとして退け、地下水の止水対策として広域遮水壁が提案されていますが、大手ゼネコンに金が流れる凍土壁のような方法でないと取り組もうとしません。

⑤廃炉の最終形態とは何か

国は廃炉のために汚染水の海洋放出が必要だとこじつけのような説明を行っていますが、事故を起こした原発の廃炉についての法律すらない現時点では、国もわからないとしか答えていません。



2022年5月25日 福島県庁前
県知事に事前了解をしないよう申し入れのスタンディング

以上のように、多くの問題を孕んでいるにもかかわらず、東電は2021年12月、海洋放出のための希釈設備や海底トンネル建設の「事前了解願ひ」を福島県、双葉・大熊両町に提出、原子力規制委員会には「認可申請書」を提出しました。

今年の4月末、東電はこれらの認可や承認もないのに、準備と称して沖合1キロの放出口などの工事を始めたため、5月13日、私たちは規制庁と東電本社に申し入れに出向きました。規制庁は「このような工事は脱法行為ではないか。規制庁が指導すべきだ。」という訴えに対して「申請の範囲の安全性の審査であり、それ以前の工事は管轄外だ」と逃げ、東電の原子力センター所長は、子育て中の女性からの「子どもたちにきれいな海を残すと約束してほしい」という要請を「約束することはできない」と突っぱね、原発事故の加害者でありながら、被害者の意見を聴き対策に活かすという態度は皆無でした。

7月22日に原子力規制委員会は工事着工申請を認可し、これを受けていたかのように、福島県知事と大熊、双葉の町長が8月2日に本体工事の着工を承認したため、翌3日、私たちは急遽、県庁に出向き抗議声明を発表し、抗議のスタンディングを行いました。しかし、東電はこんな時ばかりは素早く、翌日早朝から工事に取り掛かり、あとは希釈設備と海底トンネルを掘れば来年の6月頃には完成すると発表しました。

私は最近、核実験場となったマーシャル諸島の被爆3世の若者たちの話を聞く機会がありました。太平洋の島嶼国は過去の戦争では日本の植民地になり、核実験では被爆し島を追われ、その後は先進国の原発廃棄物の投棄場所とされました。日本はすでに2度も加害国になっているのです。若者たちは生活の場である海を、これ以上核汚染しないでほしいと訴えていました。原発事故の被害者である私たちが、加害者になってしまわないためにも、海への放射性物質の投棄はやめさせなければなりません。

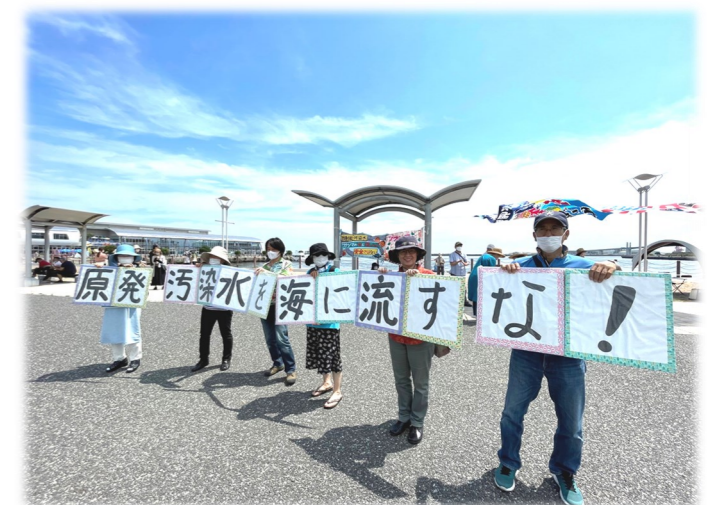
この海は地球と未来からの預かりものであり、私たちの世代がこれ以上汚染することは許されないことです。東電や国はそのような視点を持たず、着々と工事を進めています。諦めることなく活動を続けていこうと思います。

毎月13日は「汚染水を海に流すな！スタンディング」を行い、その写真を「これ以上海を汚すな！市民会議」のFacebookページにUPしています。皆さんもスタンディングをした写真を、下記アドレスまで送っていただければうれしいです。

koreumikaigi@gmail.com

2022年 8月記

「これ以上海を汚すな！市民会議」フェイスブック
<https://www.facebook.com/koreumi/>



2022年7月18日 いわき市小名浜
海の日アクション 海といのちを守るパレード

宮城県漁協北上町十三浜支所の元運営委員長であった佐藤清吾（さとうせいご）さんにお話しをお聞きしました。石巻市北上町にお住いの佐藤さんは2011年3月の東日本大震災の津波により被災。現在は海から少し離れた高台に自宅を再建。震災前から、漁業の傍ら佐藤さんは原発や青森県六ヶ所村「再処理工場」の危険性を唱え、昨年提訴された、女川原発差止訴訟原告団のお一人として、きれいな海を後世に残すため活動されています。

2時間に及ぶインタビューの一部をご覧ください。

7/19取材 聞き手：いずみ 服部

震災から11年経ちましたが、地域の今の様子、漁業の現状を教えてください

2011年3月の巨大地震や津波による甚大な被害のため地域はすっかり変わった。

ここは大室(おおむろ)という小さな浜だが、石巻市北上町内には十三の浜があった。大室も、十三浜という地域全体としても住民数はだいたい半分になってしまった。隣接する雄勝町(おがつちょう)はより影響が大きく、約75%もの住民が減少した。雄勝では、震災前、4300人ぐらいだったのが今は1000人前後という状況だ。

漁業を生業としていない被災住民は震災後にふるさとを離れる傾向が多くみられる。



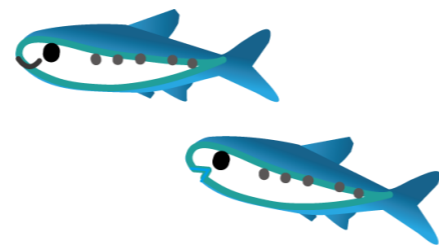
2022年7月 宮城県石巻市北上町

被災から漁業は回復しているのでしょうか？

そうです。生業がないと生きて、暮らしていけない。

震災のしばらく後、神戸に足を運んだところ、スーパーやデパートの売場に三陸産は全くなかった。韓国、中国、北海道産の海産物しかなかった。全てを失ったどん底からの操業再開、断絶してしまっただけ確保のために私だけでなく、漁業関係者は努力してきた。加えて、原発事故による放射能汚染に対応して水産物への放射能測定を漁協独自に行い、バイヤーや消費者からはようやく信頼をえられるようになってきた。宮城の漁業は回復しつつあるが、福島での操業はこれからだ。

事故を起こした福島第一原発からの汚染水海洋放出は漁業者が必死に取り組んできたそれらの努力を全て無に帰してしまう。



海洋環境の変化？

三陸沿岸では、震災後、3～4年ぐらい、サケとか順調に捕れていた。しかし、その後の4～5年は捕れなくなった。北海道もそうだ。三陸沿岸に来なくなった。

逆に、寒流系の魚ではなく、さわら、ぶり、まんぼう等の暖流系の魚が網に入るようになった。三陸沿岸の海水温が上昇しているとみられ、その一例としてサンマも捕れなくなった。以前ならサンマは大衆魚だったが、今は高級魚になっている。今月(7月)、サンマ漁が解禁になったが、刺し網で24匹しかとれなかったようだ。サンマ一匹が1万円という高額になっている。

この数年、海の環境そのものが大きく変化している。

日本海側を対馬暖流が北上し、その一部が津軽海峡から抜け出て北からの親潮本流に乗って南下しているとみられ(右図参照)、以前には捕れなかった暖流系のぶり、伊勢えびが去年までは捕れていた。今年は親潮の南下があるから伊勢えびが捕れないけど、この2～3年、宮城県沿岸でも伊勢えびが捕れていた。

本来捕れていたサケマスが捕れないだけでなく、わかめ、こんぶなどの生産ががろうじて維持されている。こんぶについては、塩釜や本吉、という大きな生産地があったが、震災後は十三浜だけになった。十三浜以外は採れない状況だ。

汚染水が流されると、炭素14などの放射性核種が海藻に凝縮すると言われており、漁業への影響は避けられないだろう。

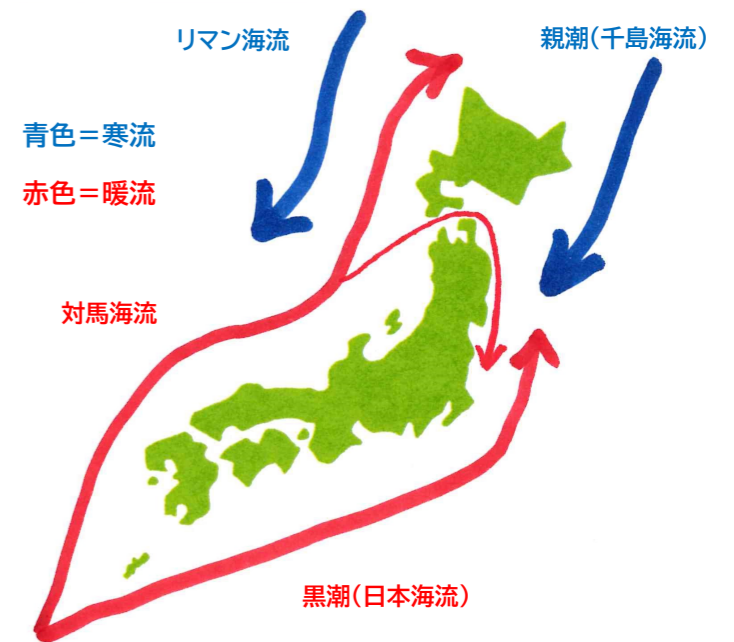
サケやサンマが捕れず、違う魚種で生計たてられる？

例えば、サケが捕れず、北海道でぶりが捕れるけど、ぶりを扱う業者がない。ぶりは南の魚だから、捕れても高く売れない。違う魚が捕ればいい、という訳ではない。加工場とか、魚種が違えば、技術、施設は異なる。お金もかかるし、安易に対応できる訳ではない。

ロシア領からの赤潮による打撃

海水温上昇による環境変化に加え、近年、ロシア領沿岸で赤潮が発生、南下し、影響が広がっている。赤潮といっても、暖水系だけでなく冷水系の赤潮がある。おとしはタコとか海岸に打ち上げられ、全滅した。去年は日本海側だけでなく太平洋側もやられた。

ロシア領沿岸を起源とする赤潮は、はじめての経験でここ最近のこと。異常なプランクトン発生というのは、ロシア領で排出される汚染物質が関連しているのだろう。



食糧生産現場が顧みられない政治、政策

そういう厳しい環境で漁業をやっている。今、日本では食糧自給率が37%と低い。水産物については好きなだけとれていた昔と違い、現代では、世界各国で水産資源を奪い合っている。たとえば、中国などには資金や交渉力で劣り市場で買うことができなくなりつつある。水産資源の枯渇という点に加え、市場競争という点でも水産物が輸入できなくなりつつある。

私は2年ぐらい前、東京大学教授の鈴木宣弘(すずきのぶひろ)さんと雑誌の企画で対談した。彼は政府に食糧自給率を高める具申を何度もしているが、対談中、「今の政府や政治家は無関心だ」と彼が嘆いていたことが強く印象に残っている。この国では非常にバランスを欠いた政治が行われており、それどころか、カルト教団が跋扈すらしている。

日本では畜産飼料なども輸入に頼っており、極めて食糧自給率が低い。海や生産現場をどう維持、発展していくのか。さらには後継者育成という点でも、海洋への汚染水放出は生産現場の荒廃に直結する事案であり、消費者のみなさんには単に漁業の枠にとどまらない重大な問題だという認識を持ってほしい。

次ページに続く

生命のふるさとである海をこれ以上汚染しないしてほしい

宮城県漁協も福島県漁連も全漁連も岩手県漁連も放出反対という立場をとっている。ただ、全漁連や政府との会合等の様子から、聞きようによっては条件闘争みたいに聞こえる時がある。

原発事故の加害者である国や東京電力(以下、東電と略)は自分のお金ではないのに、汚染水放出という加害性を顧みない決定を押し通すためにいくらでもお金を出せる。「風評」被害対策基金として300億円あてがわれたと聞いているが、交渉に対峙する側(=全漁連)が、300億円まるまる来そうだ、と思っただけではない。基金は何かがあったら出すという性質のお金で、300億円を(漁業者に)出すから流さしてください、という話ではない。

全漁連は断固反対ではないのでしょうか？

私が曲解しているかもしれないが、そういう風(条件闘争のよう)に聞こえることがある。何が何でも絶対許さない、というスタンスを貫いてほしい。金さえ出せばいいんだな、と足元をみられてしまう。

海洋放出以外の選択肢は検討されていない

約137万トンの汚染水が第一原発構内のタンク内に貯留されており、国や東電はタンク増設用がないと主張しているが、タンクを作る場所はたくさんある。第一原発内の敷地において、7・8号機を増設する予定だった場所や、土捨場という広大なスペースがある。また、敷地周辺の民有地があり、所有者からは提供する、という声がある。これらの土地は所有していても耕作や活用できる見込みはなく、いくらでも譲りますよ、という声は私は何度も現地を訪れ、聞いてきた。頼まれれば提供するよ、というところに国や東電は働きかけ、土地確保のための努力をしていない。土地はない、というのが本当はそうではない。

六ヶ所村「再処理工場」と福島原発からの汚染水で三陸の海、漁業は壊滅する恐れ

福島原発の汚染水問題は単体の問題ではなく、青森県六ヶ所村「再処理工場」本格稼働の放射能汚染環境放出のための布石だと捉えている。

福島原発からの汚染水は11年分で約137万トン。総量は約860兆ベクレルと推計され、年間22兆ベクレル以下の放出量になるよう希釈する計画がなされている。ところが、再処理工場は使用済み核燃料からたった1%のプルトニウムを取り出すために、ケタ違いの量の核廃棄物を生み出し、大気中や海洋に排出する施設だ。再処理工場が本格稼働すると、年間33京ベクレルもの放射能汚染された希ガスに加え、トリチウム水などの排水が放出される計画だ。(1京=10000兆)この布石として、国は福島ではぜひとも流したいと考えているのではないのか。

東京海洋大学の水口憲哉(みずぐちけんや)さんという海洋汚染について調査した研究者がいる。彼は、再処理工場から海洋排出された汚染水がどのように三陸沖を南下するかを調べた。水でも破れないハガキを六ヶ所村沿岸から一万枚流し、漂着先を調べた。三陸沿岸に漂着したものもあったが、房総半島から東京湾内まで流れ着いた。

先述したように、対馬暖流の一部は津軽海峡を抜け、親潮に乗って太平洋沿岸を南下している。再処理工場からの放射能汚染水を沿岸放流すれば、世界三大漁場のひとつと呼ばれる豊かな海は失われる。食糧生産の現場としてはアウトだ。

福島でも、青森でも汚染水を流してしまうと三陸や福島沿岸の海がダメになってしまう。

福島原発の溶融した核燃料に触れた汚染水(=「ALPS処理水」)については、トリチウム以外にも60数種類もの放射性核種が含まれている。国や東電は汚染水の海洋放出を急がず、陸上保管して減衰を待つなどの選択肢を再検討してほしい。

お話し：佐藤清吾さん、聞き手：いずみ 服部

原子力に対する想像力の欠如が生み出した女川原発2号機再稼働の難題

放射能問題支援対策室いずみ顧問 篠原 弘典

場当たりの的に設けられてきた安全基準(想定地震動)

東日本大震災で運転停止して以来、女川原発は11年間止まったままですが、それを東北電力は2022年度中に安全対策工事を終えて再稼働したいとの希望を述べていました。しかし安全対策工事として「これまでに経験のない」耐震補強工事をせざるを得なくなったので、工事完了時期を2023年11月、再稼働を2024年2月に延期すると5月末に発表しました。

それまで絶対に起こらないとしてきた炉心溶融事故が福島原発で起こって、大量の放射能が放出され大地を汚染する事態となって、原子力を推進してきた人々の想像力が如何に貧困で、起こった事態に対処する能力を如何に欠いていたかが、事実によって次々に明らかになりました。今回必要になった格納容器の圧力抑制室の耐震補強工事とその想像力の無さを証明する事実なので、かいつまんで紹介しておこうと思います。

実は女川原発は設計時に想定した起こりうる最大地震動に現実として何度も超えられてきた原発です。

女川原発1号機を設計した当時、東北電力の技術者は実際に起こる「最強地震動」を250ガル、実際には起こらないけれども設計上想定しておく「限界地震動」をその1.5倍の375ガルに設定しました。

ところが運転を開始した1984年以来、その想定を超える地震動に何度も襲われて来ました。2003年5月に起こった三陸南地震で記録された発電所内の地震計の加速度は225ガル、2005年8月の宮城県沖地震の加速度は251.2ガルでした。この揺れは想定地震動を超えていないように思われますが、地震はいろいろな周期の波動が集まったもので、詳細に解析すると(はぎ取り解析と言います)、一部の周期では想定地震動を超えていました。

その後、他の原発でも同様の事態が起こって、耐震設計審査指針の見直し作業が進められ、2006年9月に当時の原子力安全委員会は新指針を決定しました。そしてこの新指針の決定を受けて、東北電力は基準地震動を580ガルに見直し耐震補強工事を行いました。この想定も東日本大震災の原因となった東日本太平洋沖地震でまたまた超えられる事態となったのです。この時記録された地震動は福島原発での記録を上回る568ガルで、これも詳細に解析すると基準地震動を超えていました。

これまでの経過を受け、東北電力は女川原発を再稼働させるために原子力規制委員会の新規制基準に適合するよう基準地震動を1000ガルに見直しました。この見直しによって今回の圧力抑制室の耐震補強工事をせざるを得なくなったのです。



建設中の女川原発1号機
(宮城県女川町 1981年ごろ)

次ページに続く

以下や15ページ：図面や写真などの出典

2022年 3月30日 発表 東北電力によるプレスリリース

別紙「女川2号機における安全対策工事完了時期の見直しの概要について」より抜粋

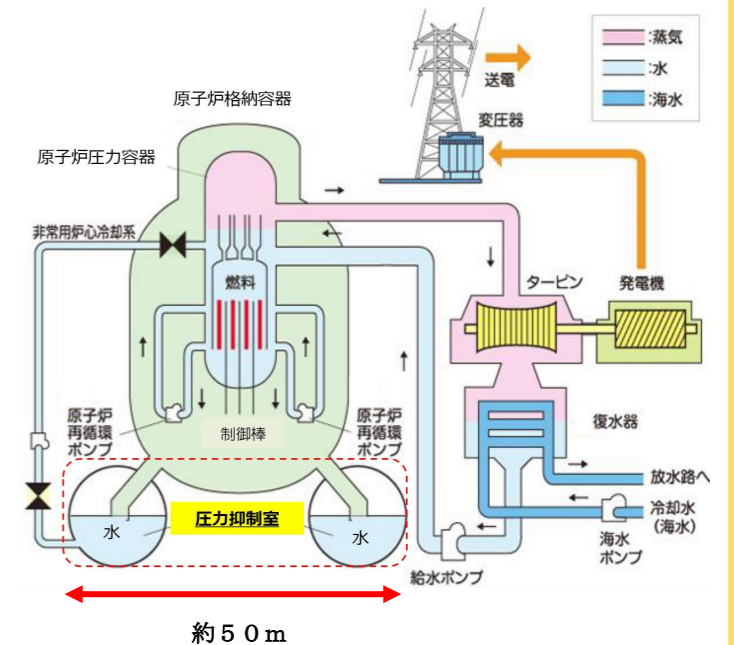
放射能汚染された管理区域内における、これまでに前例のない難工事

それでは「これまでに経験のない工事」という圧力抑制室の耐震補強工事とはどんなものなのか。圧力抑制室とは核分裂の起きている圧力容器の外側にある格納容器の一部で、高さ10m、直径50mのドーナツ状の巨大な鋼鉄製の構造物です。中には約2900tの水が貯蔵されています。格納容器内の配管が破断する事態が起こって、蒸気が噴出し圧力が上昇した場合、その蒸気をプール内に逃して凝縮し、圧力を下げて破壊を防ぐために設けられている設備です。

その鋼鉄製の外壁を補強するために、「強め輪」と言われるリング状の部材が内部に溶接されていますが、基準地震動を1000ガルに見直した結果、現状の部材では持たないことになりました。そのため64枚ある強め輪のうち32枚の部材高さを嵩上げし、補強部材を追加する工事が行われるのです。

強め輪は高さ10mの円筒状の内部をグルッと回っている部材ですので、1枚およそ30mの長さがあります。ところが圧力抑制室は出入りする1.5mの開口部が2カ所あるだけの密閉空間なので、長い部材は小分けにして内部に搬入し溶接するしか手段が取れないのです。しかも内部には溶接作業をするための足場が組まれていて、錯綜する状態になっています。

さらには長年運転を続けてきた原発なので、圧力抑制室の内部は放射能によって汚染された管理区域になっています。東北電力の説明では内部の放射能汚染は高いところで5μSv/hになっているそうです。作業員の被ばく管理を行いながらの作業ですし、密閉空間なので空調も大事になってきます。過去の耐震補強の溶接工事では、何度も火災が起こったりしています。そして何よりも溶接工事は強度を確保するために温度管理が大切で、適切な温度管理が出来なければかえって強度を劣化させてしまう可能性もあります。

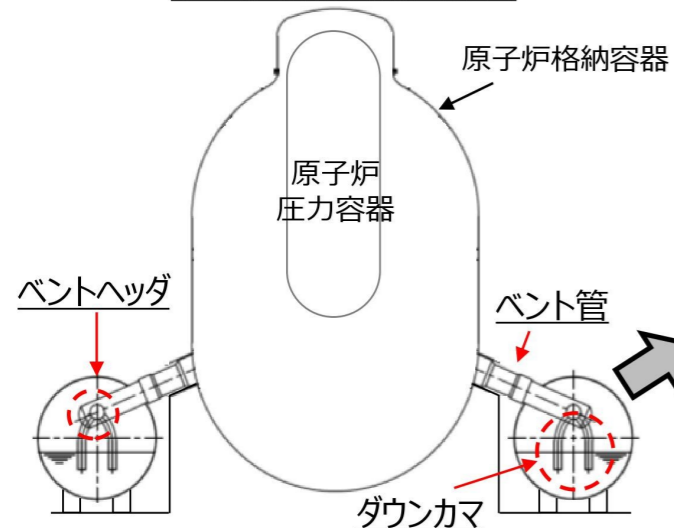


この様に追加された安全対策の耐震補強工事はかなりの難工事ですが、新規基準に適合するために基準地震動を1000ガルに見直したためです。ところが女川原発の歴史を振り返ってみると、建設計画が発表された1960年代後半、地震発生メカニズムに対する知見はまだ未熟なものでしたが、女川原発の敷地で発生する最大地震動を1000ガルとすることもその時代の限られた知見からも可能だったのです。しかし東北電力は最も低い数値を採用しました。

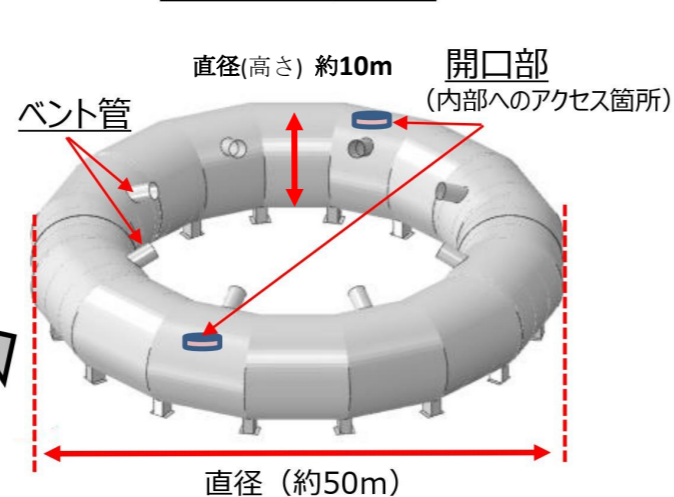
その詳細については許された字数の制約で語れません。その当時の取締役や技術者の想像力の無さが、今日の事態を招いてしまっているのだと考えています。

2022年 8月記

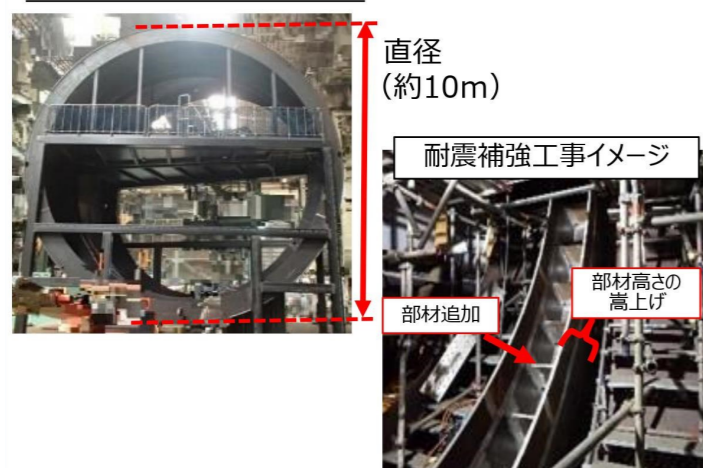
原子炉格納容器全体図



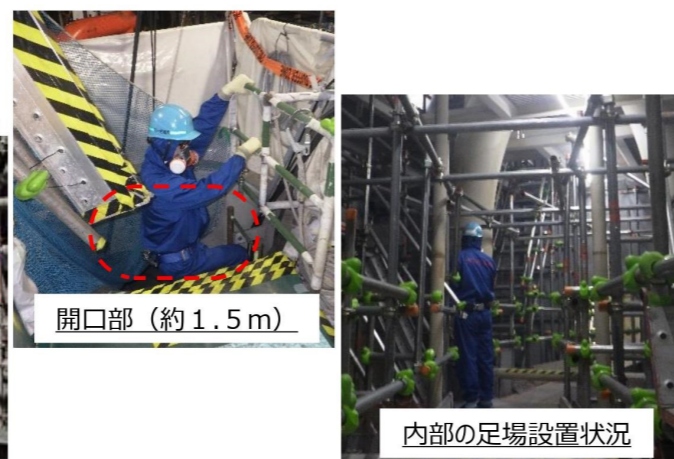
圧力抑制室全体図



圧力抑制室の実機模型



圧力抑制室開口部と内部の足場設置状況



<圧力抑制室>

原子炉格納容器の一部で、大量の水を常時貯蔵している円環形（ドーナツ状）の構造物。格納容器内の配管が破断し、蒸気が発生して圧力が上昇した場合などに、蒸気を圧力抑制室に導き冷却することで、原子炉格納容器の圧力を下げる。また、原子炉を冷却する機能が失われた場合に非常用の冷却水を供給する役割も果たす。なお、女川2号機の圧力抑制室には、常時約2,900tの水を貯蔵している。